

Verdan 分類の掌側 Zone 6, 7背側 Zone 7, 8 での切創による多数腱断裂, リウマチ性自然断裂治験例で好成績を得た。同 Zone は Flexor Retinaculum で囲まれる Karpal Tunnel, Extensor Retinaculum で作られる 6-Strecker Fach が Topographie 上の特徴であり, Verdan はややもすると起る傾向にある gemeinsamen 或いは teilweisen fibrösen Block の予防として重要腱の撰択縫合, 腱の Amplitude, Zug Winkel の考慮上 Retinaculum 処置の重要性を強調する。

### 28. 腎移植後の特発性大腿骨頭壊死—第2報—

木村 純, 加藤之康 (国立佐倉)  
小林英夫 (小林整形外科)

腎移植後に発生する骨壊死症につき昨年について調査しました。腎移植 65 例中 14% に骨壊死の合併をみました。血清脂質ではトリグリセライド, 血清リポ蛋白では LDL, VLDL が骨壊死群で高い傾向がみられましたが, 有意差はありません。一方, PTH の高値と 1.25 (OH)<sub>2</sub>D の不足という条件下に, 1.25 (OH)<sub>2</sub>D に拮抗作用のあるステロイド投与が加わると骨代謝の悪循環が増強され, 骨壊死発症の誘因の一つとして考えられる。

### 29. 整形外科の針治療—著効例の検討—

鈴木弘祐 (鈴木整形外科)

昭和56年1年間に546例の針治療を行い, 142例26%著効を得た。特に頸椎疾患は, 28.2%が著効を示し, うち45.3%が発症～治療開始1ヶ月以上の慢性経過をとる症例にも充分なる治療効果を有する事がわかる。しかし, 治療効果の判定が自覚症に基く事から客観性に問題があり, 今後可及的痛みの定量化をはかり, 西洋医学と機能病理学的な東洋医学との接点を求めるべく努力を要すると考える。

### 30. 当院における痛風症例の検討

石川正士 (桜之宮病院)

痛風患者21例について特にその尿酸代謝動態につき検討した結果を報告した。其等全症例の血清尿酸値, 尿酸尿中排泄量, 尿酸クリアランス, クレアチニンクリアランス, 及びクリアランス比の各平均値は, 9.6 mg/dl, 0.62mg/kg/h, 7.8ml/m, 76ml/m, 及び10.4%であった。又, 全症例を尿酸尿中排泄量と尿酸クリアランス値より分類すると, 過剰生産型13例, 排泄低下型7例, 混合型1例であったが, 各型毎の各数値の相関々係より見た尿酸代謝の動態を述べ, 更に治療薬剤の選択等治療面についても言及した。又, 最後に巨大結節の手術症例を供覧

した。

### 31. 教室における特殊外来の現況と展望

大木健資 (千大)

1982年12月現在, 当教室は11の特殊外来を持ち, 教室員のほか, 関連病院より14名の医師が参加している。特殊外来における問題点と対策として次のことを指摘した。1. 専門領域のみを取り扱う医師となつてはならないこと。→整形外科全般の修練と平行しておこなうこと。2. 特殊外来のマナー化防止。→専門分野における定期的抄読会や症例検討会を持つこと。3. 得られた成果の還元。→研修会, 研修医の受け入れ。4. 関連病院からの自由参加。→Open system 化。5. 大学病院のベッド数不足。→関連病院ルート明確化。(Follow up 体制の確立, 成績判定基準の画一化)

### 32. 当院における頸椎手術の現況 (77症例について)

立岩正孝 (立岩整形外科)

脊柱疾患別統計をみると頸椎部は3635名, 全体の26%をしめる。手術例は77名あり, 頸椎椎間板ヘルニア69名, 脱臼骨折5名, 頸髄腫瘍2名, 頸椎異物1名。椎間板ヘルニア前方法施行例は65名99椎間である。男に多く C<sub>5-6</sub> に多発, 次いで C<sub>6-7</sub> となっており, 病型は年をとるほどに Radiculopathy が多い。Radiculopathy は頸部牽引療法によく反応するので, 観血的療法の対象は, 主として Myelopathy であった。

### 33. 頸椎手術症例の検討 (30例) 1981.7.~1982.11.

坂巻 皓, 黒田重史, 保坂瑛一,  
松岡 明, 雄賀多聡 (鹿島労災)

開院後1年5ヶ月に経験せる頸椎手術症例は, 30例で内, 頸部脊椎症26例 (Myelopathy 22; Radiculopathy 4; Keegan Type Moter Loss 2), R-A による C1-2 Instability 1例, Cord inj. 3例であった。術式別では, 椎体亜全剝, 椎体前方固定術18例 (Cord inj. 1; Radiculopathy 4; Myelopathy 13), 後方除圧, 椎管拡大術9例, 前後合併手術2例 (多髄節障害の Myelopathy), C1-2後方固定の1例であった。我々は前方除圧に当り椎体後面皮質切除を通例としているが, Myelopathy 17例中, 急性増悪を示した7例 (41%) に, 後縦靱帯の深層の裂隙より後方へ脱出した Hernia Mass を認めた。

### 34. 頸椎脊柱管拡大術の臨床経験

伊藤達雄, 辻 陽雄, 山田 均